

『教える人としての私を育てる』

学生のこころをゆさぶる 教育実践力が伸ばせる 贅沢な内容

編集：屋宜譜美子・目黒 悟

定価：2,730 円(本体 2,600 円＋税 5%)

発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



昨今の看護師養成所では社会人としての経験のある入学者の割合が増えている。社会人入学生への教育は、豊かな経験と幅広い知識をもつ人たちにされる成人教育としての側面が大きい。彼らの学習意欲を満足させ、多様な価値観や考え方のうえに人間愛を基盤とする“看護のこころと技”を育んでいく教育が求められている。それは同時に教える者の教育力や指導力が問われることでもあり、時折、自分にそのような教育ができるのだろうかと不安にかられる。

ちょうどそのような時、本書に出会った。読み始めると、「学ぶとは何か」「学生の学びに看護教員や実習指導者はどのようにかわればよいのか」という、これから看護教育をめざす看護師にとっても、すでに看護教育に携わっている者にとっても命題ともいべき「問い」に対する心地よい応答が得られ、夢中になって読み進んでしまった。

これは、執筆者の“ねがい”がこの本のなかに、あふれるほど詰まっているせいだと思う。第一線で活躍する執筆者だからこそ教える者のニーズが手に取るようにわかるのだろう。教える者はどんなふうに思い悩むのか、何を知りたいと思っているのか……、それらに答えるように多彩なエピソードやすぐに参考にできる実際の取り組みが具体的に紹介されている。

例えば、教育の質を高めるため教員全体で授業研究会に取り組みたいと考えている読者には、リフレクションの過程やリフレクションの参考例、参加する人の役割、授業研究会の進め方、揃えておくとい資料などが紹介されており、それらを参考にすればすぐにでも授業研究会が始められる。「あっそうそう」と納得したり、「こうすれば私にもできる!」と思える手がかりが得られるので、どんどん先が読みたくなるのである。

また、本を読み進んでいくうちに不思議と自身の看護実践がよみがえってくる。しかも今なら、その実践のどこが看護でどこが看護と呼べないのか、かなり踏み込んだリフレクションができる。次第に自分が抱いどころにしていたこと、学生に伝えたいことが明確になってくる。伝えたいことが学生に伝わる授業がしたい、学生のこころを揺さぶる指導がしたいと思っている人にとって、教育実践力を伸ばし、学生とともに学び、ともに育つための行動がすぐに起こせる贅沢な内容になっている。

本書は、看護とはなにか、教えるとはなにかの哲学的問いに自分なりの答えを模索している人、教える人としての自分を育てたいと思っている人、看護教育にかかわるすべての人にとって必読の書である。